

エッセイ

新しい旅のはじまり

千石 涼太郎



若いころ、「オフロードエクスプレス」という月刊誌で紀行文を書いていた。ランクル、パジェロ、サファリ、エスクード、プロシードマービー……といった四駆に乗って、林道や海岸線の道を走りながら旅をする。美味しい名産品を食べることも仕事のうちではあったけれど、走りを楽しみ、キャンプをしたり、釣りをしたり、寂れた温泉に入ったりしながら、美しい風景を見て風土を感じる事が主な旅の目的だった。

真夜中に東京を出発して現地まで走ることが多く、なかなか大変な仕事ではあったのだが、楽しいこともたくさんあった。感動し、興奮して、旅がますます好きになった。

いまでも年に数回、クルマで旅をすることもあるけれど、若いころのようにワクワクすることがなくなってしまった。

心が震えるような旅がしたい。旅のスタイルを変えたら、また新鮮な気持ちになるだろうか。そんなことを思っているとき、頭に浮かんだのがバイクでの旅だった。しかし、自動二輪の免許はない。取得すべきか迷ったが、まずは

原付からはじめることにし、ネットや友人のコネクションを使って中古のスーパーカブを探すことにした。一ヶ月ほどたち、友人の紹介で、手ごろな価格のスーパーカブを発見。「これだ!」と思った。消費税アップの直前のことである。

まだ札幌は雪のなか。買ったところで乗れるわけではないのだが、出物が見つかったタイミングで買わないと後悔するに決まっている。

バイクショップが美幌ということもあり、納品してもらくと輸送代がかかるのだが、岩見沢の友人宅の除雪機やバイクと一緒に運ぶついでということで納車代を無料にさせていただけることになり、4月の半ば、わたしは札幌から岩見沢まで受取りに行くこととなった。

ヘルメットをネットで購入。リュックに入れて高速バスで岩見沢。そして、友人宅の前に止まっているトラックから降ろされた我が愛車と出会うことになる。

事前に交付してもらっていたナンバーを取り付け、エンジンに火を入れる。見た目もきれい、音もいい。よし行こう!

というわけで、わたしは札幌に向けてさっそうと走り出した……と、いいたいところなのだが、わたくし最後にバイクなるものに乗ったのは、ラッタッタ全盛期。原付はヘルメットなしでいい時代。しかも、カブははじめてである。ギアチェンジをどうすればいいかは事前に勉強してある。ウインカーのスイッチが右にある(カブ特有)ことや、ライトのスイッチなどもすでに勉強済みだ。

しかし、走り出して3秒で「バックミラーが合っていない!」ということに気づき、Uターン。手を振って見送ってくれていた友人に、「バックミラーってどうやって直すの?」と聞く始末。心配そうな顔をしている友人をバックミラー越しに見ながら、必要以上に丁寧にシフトアップしたのだった(「水曜どうでしょう」のだるま屋ウィリー事件の再現をしないためです)。

岩見沢から札幌へ向かう場合、通常であれば国道12号線を使うところだろうが、なにせヘルメットをかぶってバイクに乗るのがはじめてで、「ヘルメットかぶっているとあずましくない!」とっているビギナーである。

かなり遠回りにはなるけれど、交通量の少ない新篠津を経由し、のどかな畑のなかをのんびりと走ることにした。

信号も少なく、ギヤを変えることもないツーリングはとても快適。「これぞ北海道の醍醐味! 北海道はやっぱりバイクだよなあ」などと、ちょっと走ったくらいで、ベテランライダーのようなことを思ったりもしたのだが、ふと気がつくとも手がひんやりと冷えていた。

「原付なんか、素手でいいべや」と思っていたのだが、走ると思いのほか寒かったのだ。念のために持っていたすべり止めつきの軍手を取りだし、フリースのファスナーを首まで上げて走り出す。運転にも徐々になれ、スピードを出したくなる気持ちもわかるが、我慢、我慢。

札幌市内に入ると、信号もクルマも多くなり、30キロ規制の原付はどんどん抜かれる。トラックやバスなど大型車が後ろにつくと圧迫感がある。接触を恐れ、路肩に逃げる。すると、散乱したゴミやデコボコの路面という手荒



な歓迎。「原付がパンクしやすいというのは、こういうことか!」と納得した。

原付には二段階右折という厄介なルールもあり、札幌に着くころには「やはり旅をするなら、小型の免許が必要だなあ」と思うようになっていたが、十代のころ自転車で何十キロも走っていた時代に感じていた感覚とも、クルマに乗っていたころとも違う、「風」や「疲労」や「緊張」に、「原付もなかなかいいじゃないか」と思うようになっていた。

いまでは生活の足にもなり、狭い路地を頻繁に走る。その度に、水道工事などで掘り返され補修され、継ぎはぎだらけの場所を通る。そして、「ここの工事、下手だなあ」とか、「ここはメチャクチャうまいべや」と心のなかでつぶやいたり、「この辺はデコボコが多いなあ」と文句をいいながらも、実はこのデコボコを避けながら走るのが、ちょっとした楽しみになってきている。

まだ感動やワクワク感が楽しめる旅はできていないけれど、きっと近い将来、見知らぬ街の名もない道路を駆け抜けたとき、心が踊るのだろうなあという予感がある。そして、バイクを買ってからの一番の収穫は、こんな話ができる“カブ仲間”ができたことである。



千石 涼太郎(せんごく・りょうたろう)

■プロフィール

ノンフィクション作家・エッセイスト。小樽市生まれ、札幌市在住。東京の出版社勤務を経て執筆活動に入る。近年は、観光振興・地域活性化、ホスピタリティの啓蒙活動、道産ワインやジンギスカンの普及にも邁進中。小樽ふれあい観光大使や北海道遺産ジンギスカン応援隊のメンバーとしても活動している。

近著『竹鶴とリタの夢 余市とニッカウキスキー創業物語』をはじめ、『なまら北海道だべさ!!』『なんもかんも北海道だべさ!!』『県民性の謎』『口癖の心理学』『不思議の大地 なまら北海道』『北海道はじめて物語』など著書多数。

公式ブログ <http://blog.gutabi.jp/special023/>

facebook <https://www.facebook.com/indenaikai>

